

# 賀籠沢遺跡 2004 年度発掘調査の成果

東北学院大学佐川ゼミナール

## 調査要項

遺跡名 賀籠沢（かござわ）遺跡  
所在地 宮城県柴田郡村田町大字小泉字賀籠沢  
調査期間 2004 年 7 月 27 日～8 月 10 日  
調査面積 65 m<sup>2</sup>  
調査主体 東北学院大学文学部史学科 佐川正敏（考古学：佐川ゼミナール）  
調査協力 村田町教育委員会、村田町歴史みらい館、石黒伸一郎、藤原二郎、高橋健寿、  
長友恒人（奈良教育大学）、下岡順直（奈良大学大学院）、佐藤正隆（龍泉院住職・  
宿舎管理者）、菊田行衛（地権者）

## 立地と周辺環境

**立地** 遺跡は、村田盆地の東縁にあたる高館丘陵にあって、この丘陵の西麓を流れる白石川支流の新川東岸に位置し、北を賀籠沢、南を一子沢に挟まれた東西方向に舌状に張り出す丘陵の尾根上に立地する（Fig.1）。海拔高度は 100m 前後で、現河床から約 40m を測る。

**周辺環境** 新川流域周辺には、賀籠沢遺跡、百々自木遺跡、山入 A 遺跡、一子沢遺跡、梨木沢 A 遺跡、寒風沢遺跡、無刀関 B 遺跡などの後期旧石器時代の遺跡が密集する（Fig.1）。この地域では、上部中新統白沢層の軽石質凝灰岩層中に珪化木が豊富に埋蔵されており（田村 1986）、この珪化木の内部に石器製作に適した玉髓が包含されている。これらの遺跡では、この玉髓を素材にした石刃・ナイフ形石器が集中的に製作されており、玉髓原産地遺跡である新川流域遺跡群を形成している（大場 2004）。

## 調査経歴

本遺跡は、1990 年に高橋健寿氏によって発見された。1992 年には今回の調査区の西側造成地から藤原二郎氏により多量の石器（以下、造成地採集資料）が採集され、西側造成地の断面から黒耀石製のナイフ形石器が採集された。1993 年にはこのナイフ形石器が採集された地点で、東北歴史資料館（当時）による確認調査が行われた（阿部・山田 1994）。また、この際には一子沢遺跡の対面にある山入 A 遺跡でも確認調査が行われた。なお、本遺跡群周辺では、高橋健寿氏の精力的な踏査により珪化木埋蔵地が多数確認されている。

2003 年には、当ゼミナールによる本格的な発掘調査（33 m<sup>2</sup>）が行われ、二側縁加工のナイフ形石器など玉髓製石器が 30 点出土した（佐川・大場 2003）。

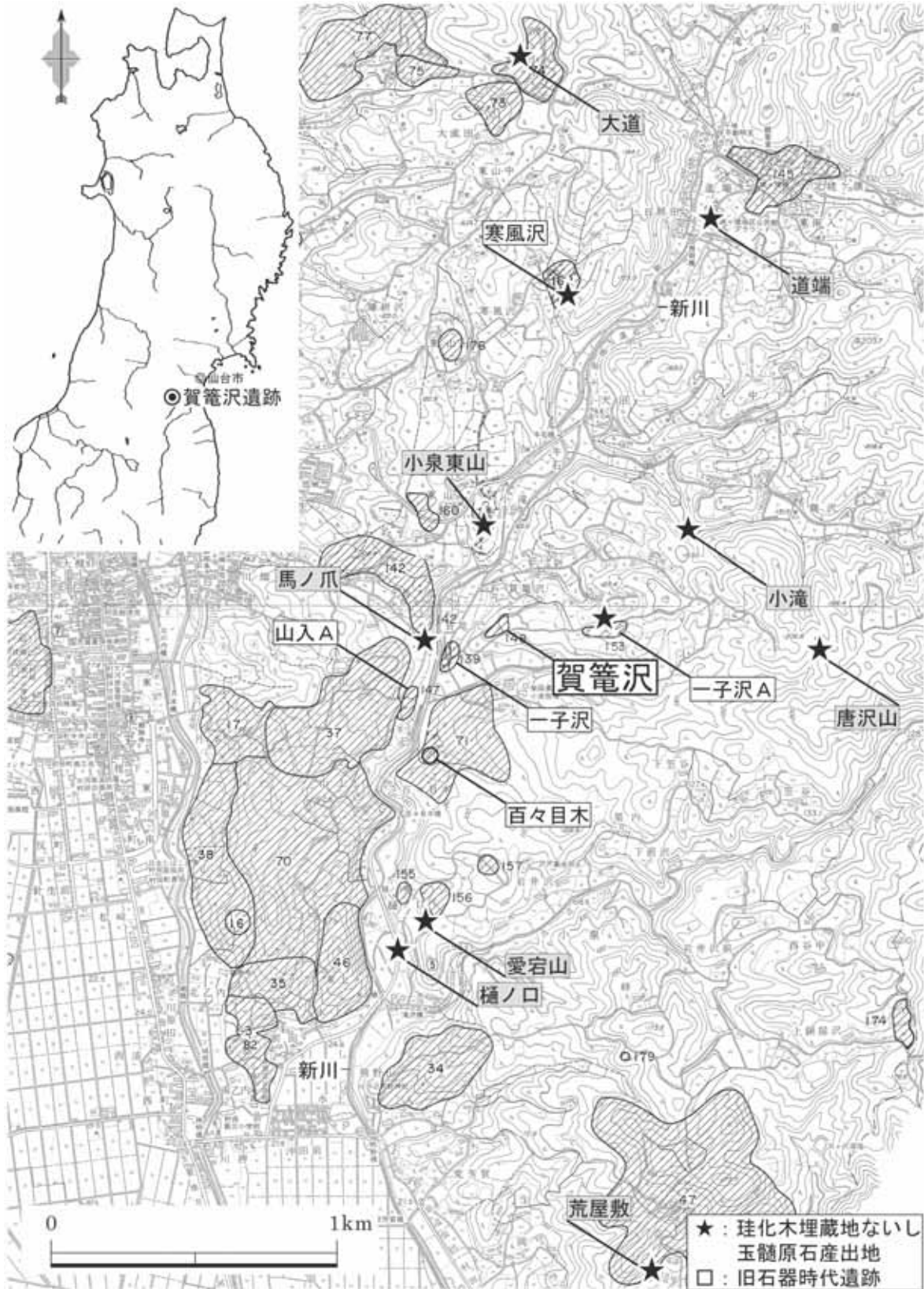


Fig.1 賀籠沢遺跡と新川流域遺跡群の位置

(『村田町遺跡地図』(村田町教委：1995)より作成)

\* 梨木沢 A 遺跡は大道から北東約 700m、無刀関 B 遺跡は大道から北約 2.5km 離れたところに位置する。

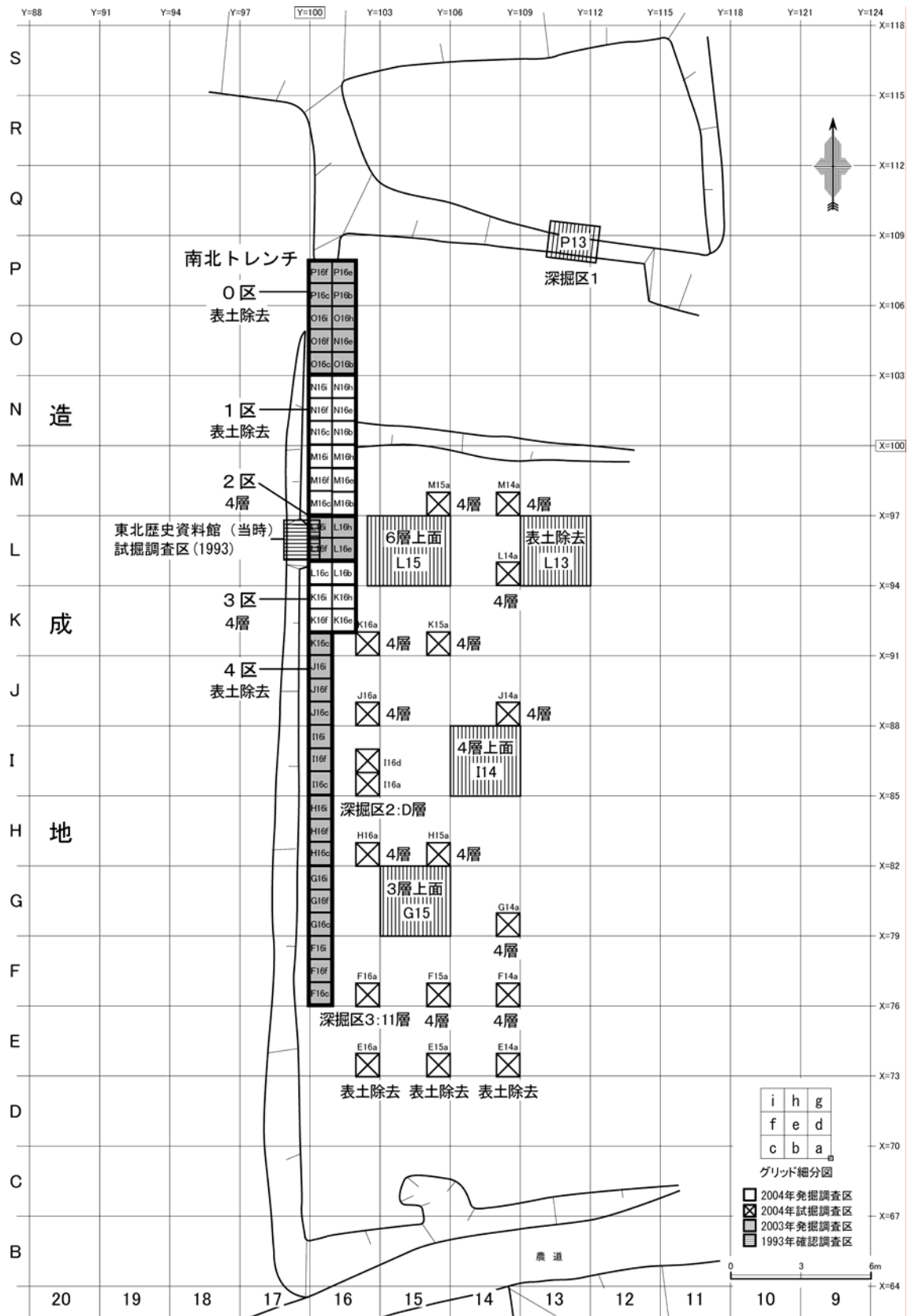


Fig.2 調査区配置図と調査到達地層

## 調査成果

### 1 調査目的

今回の調査では、まず 3mグリッドの南東角に 1×1m の小グリッドを 14～16 ライン上に 17ヶ所設定し、少なくとも 4層まで掘り下げて、石器の分布の広がりや石器集中区を確認することを目的の 1つとした (Fig.2)。つぎに、調査地西側に隣接する造成地に接する地点に 0区(O16b.c.e.f・P16b.c.e.f)、1区(M16b.c.e.f.h.i・N16b.c.e.f.h.i)、2区(L16e.f.h.i)、3区(L16b.c・K16e.f.h.i)、4区(F16c.f.i・G16c.f.i・H16c.f.i・I16c.f.i・J16c.f.i・K16c)を南北トレンチとして設定し、西側造成地から投棄された石器の分布範囲を確認するために、表土のみを対象とした発掘調査を行った。2・3区ではさらに 4層まで掘り下げ、昨年度の調査において L15 トレンチで検出した石器分布の西への広がりを確認することを目的とした発掘調査を行った (Fig.2)。

### 2 基本層序 (Fig.3)

- 1層 : 表土 (腐葉土)
- 2層 : 旧耕作土 (褐色土)
- 3層 : 黄褐色粘土層
- 4層 : 粘土ブロック混じり黄褐色粘土層
- 5層 : 粘土ブロック混じり明褐色粘土層
- 6層 : 褐色粘土層 (I16a.d の 6層上面でサンクラックを確認)
- 7層 : スコリア風化層
- 8層 : スコリア層 (川崎スコリア : 2.6～3.1 万年前)
- 9層 : 暗褐色砂質粘土層
- 10層 : 黄褐色砂質粘土層
- 11層 : 褐色砂質粘土層
- 12層 : 軽石層 (愛島軽石 : 5～8 万年前)

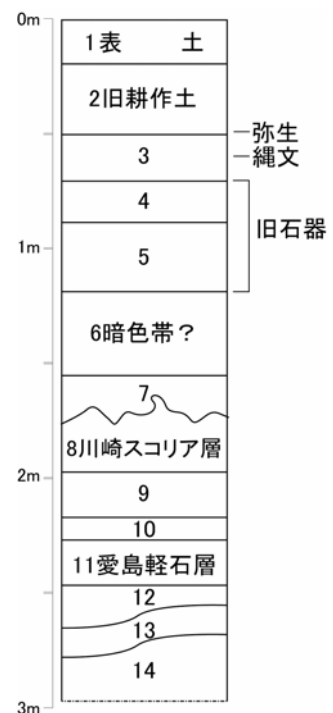


Fig.3 層序模式柱状図

なお、F16a では奈良教育大学・長友恒人氏と奈良大学大学院・下岡順直氏の協力により、4・5・6層のルミネッセンス年代測定のためのサンプリングと検定棒の打ち込みがおこなわれた。年代は現在測定中である。

### 3 遺物出土状況

**小グリッド** 小グリッドでの確認調査において、石器の分布は確認できなかった。ただし、J14a では 3層下部から縄文時代早期後葉の縄文条痕土器 (Fig.9 - 3～6 : 注 1) がまとまって出土した。また、H15a では 3層上面で弥生土器と磨石を含む弥生時代と推定される土坑を検出した。しかし、2層は旧耕作土のため、土坑の本来の掘り込み面はすでに攪乱されたと考えられる。したがって、調査区南半の 3層が縄文時代の主要な包含層であり、3層上面より上位に本来弥生時代の包含層があったと考えられる。

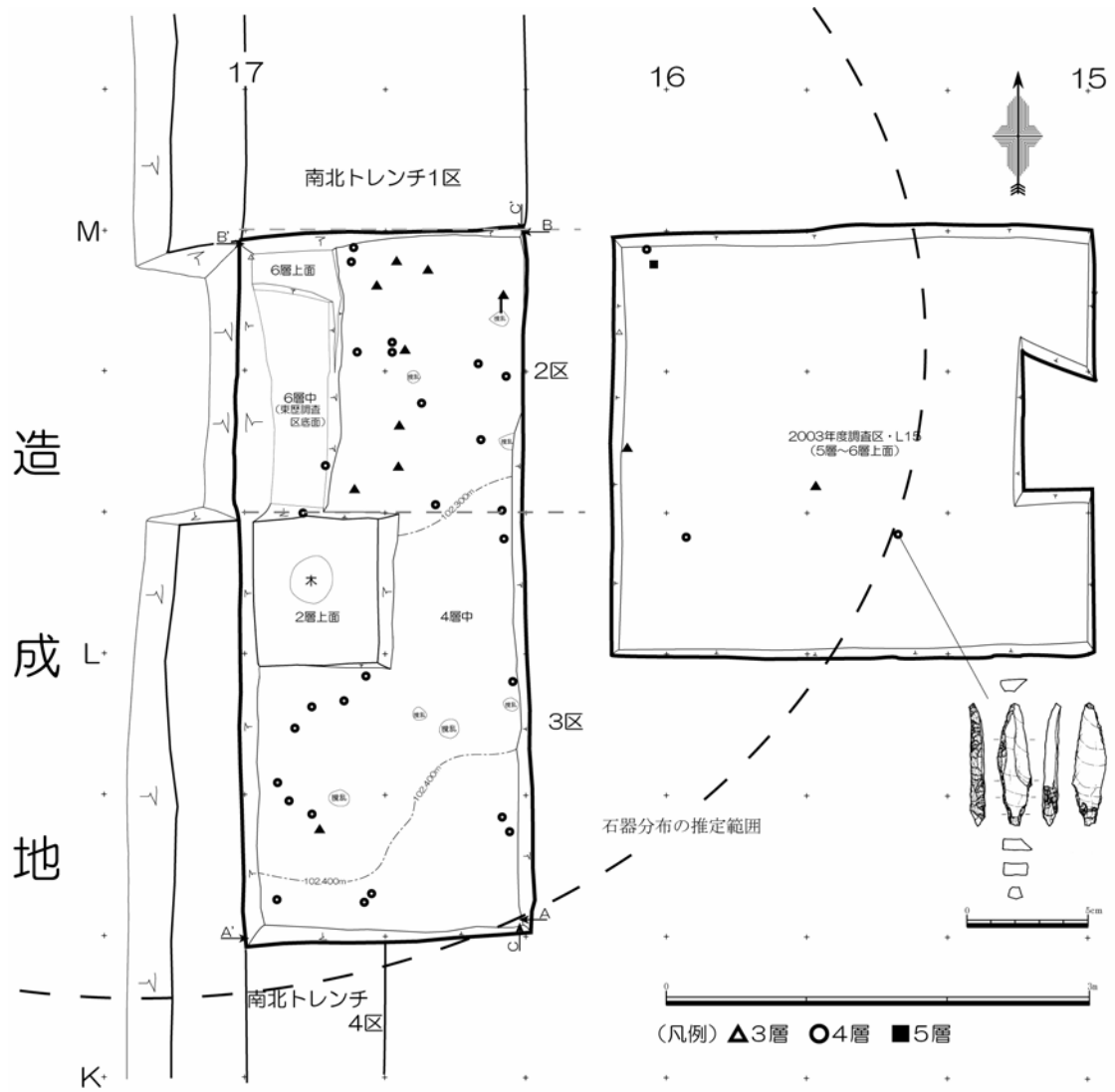


Fig.4 南北トレンチ2・3区出土石器平面図



Fig.5 南北トレンチ2・3区出土石器垂直分布図

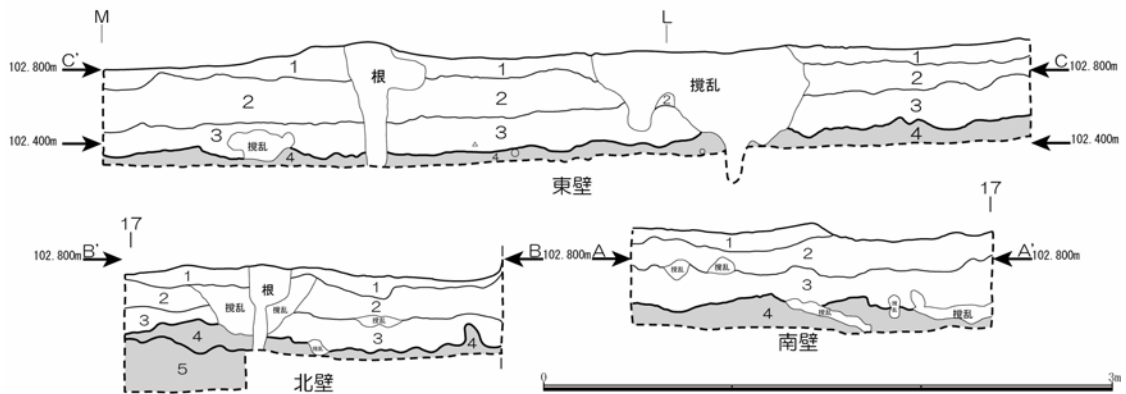


Fig.6 南北トレンチ2・3区地層断面図

**南北トレンチ** 南北トレンチ 0～4 区の調査において、石刃や石刃核を含む石器が 0 区で 13 点、1 区で 52 点、2 区で 2 点、3 区で 13 点、4 区で 5 点出土した。石器の分布は 1 区で多く、0・2・3・4 区では希薄となる。1 区に石器が集中するのは、もともと西側造成地の 1 区に隣接する付近に造成地採集資料の本来の包含層（石器集中区）が存在し、造成に際して攪乱された石器の一部が本調査区に投棄されたことを示すものであろう。

さらに、2・3 区では 4 層の途中まで掘り下げ、3 層より石器が 2 区 12 点・3 区 1 点、4 層中より 2 区 12 点・3 区 13 点出土した（Fig.4～6）。4 層の石器の出土量が多い。3 層が縄文時代の包含層であるので、旧石器は 4 層を中心に分布したと考えられる。2・3 区出土の旧石器は散漫な分布状況を呈し、昨年度調査の L15 の石器分布と東北歴史資料館の試掘調査で得られた石器、そして今回推定できた造成地採集資料の本来の包含位置を考慮するならば、以上の石器は一連のもので、その分布範囲は直径 7m 以上と推定される。

なお、3 区 K16e.f.h.i のうち、3 つの小グリットの 3 層と 4 層の一部では、微細遺物検出のための土壌サンプリングを行った。水洗選別の結果、玉髄製チップが 3 層で計 9 点（K16e：4 点、K16f：3 点、K16i：2 点）、4 層で計 12 点（K16f：1 点、K16h：4 点、K16i：7 点）得ることができた。

#### 4 出土遺物（Fig.7～9）

今回の調査では石器 196 点（表土：91 点、2 層：29 点、3 層：26 点、4 層 41 点、攪乱層：4 点、表採：3 点、H15a 土坑内 1 点、地点不明：1 点）、縄文・弥生土器 411 点が出土している。石器には石鏃や石匙などが含まれず、2 層・3 層の半数以上の石器分布範囲が南北トレンチ 2・3 区の 4 層の石器分布と同様に範囲内にあることは、2 層・3 層の石器の多くが 4 層からの浮き上がりであることを示そう。つまり、石器の多くが後期旧石器時代の所産と推定される。

**石器石材と石器器種** 石器石材は玉髄 178 点、珪化木 1 点、黒耀石 1 点、珪質頁岩 3 点、黒色頁岩 2 点、頁岩 3 点、凝灰岩 1 点、安山岩 1 点、石英岩 1 点、粗粒安山岩 4 点、花崗岩 1 点で、玉髄が圧倒的多数を占める。

石器組成はサイドスクレイパー 1 点、小礫素材のスクレイパー 1 点、彫刻刀形石器 1 点、二次加工ある剥片 2 点、ヘラ形石器 1 点、石刃核 13 点、石刃核ブランク 1 点、石核 4 点、稜付き石刃 4 点、石刃 25 点、打面再生剥片 2 点、原石 1 点、外皮 1 点、剥片 97 点、両極剥片 4 点、チップ 33 点、ハンマーストーン 3 点、磨石 2 点である。

#### まとめと展望

**まとめ** 本調査地 3 層上面より上位が弥生時代に、3 層が縄文時代早期に、4～5 層が後期旧石器時代に属すると考えられる。後期旧石器は南北トレンチ 2・3 区と今年の L15 にかけて分布する。造成地採集資料は、南北トレンチ 1 区西側に隣接する付近に包含されていた可能性が高い。これは、本調査地の後期旧石器とともに一連の分布をなしていた

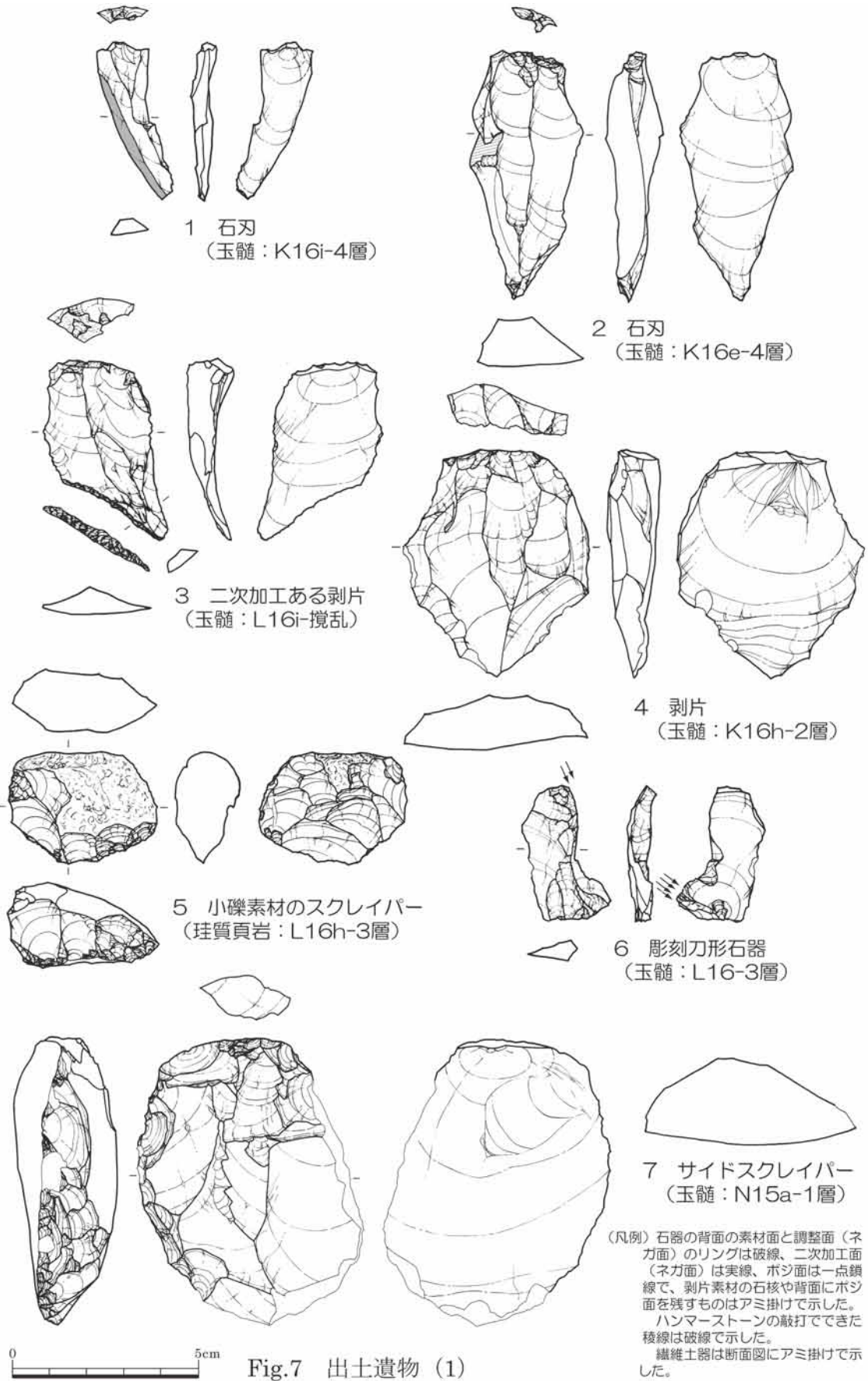


Fig.7 出土遺物 (1)

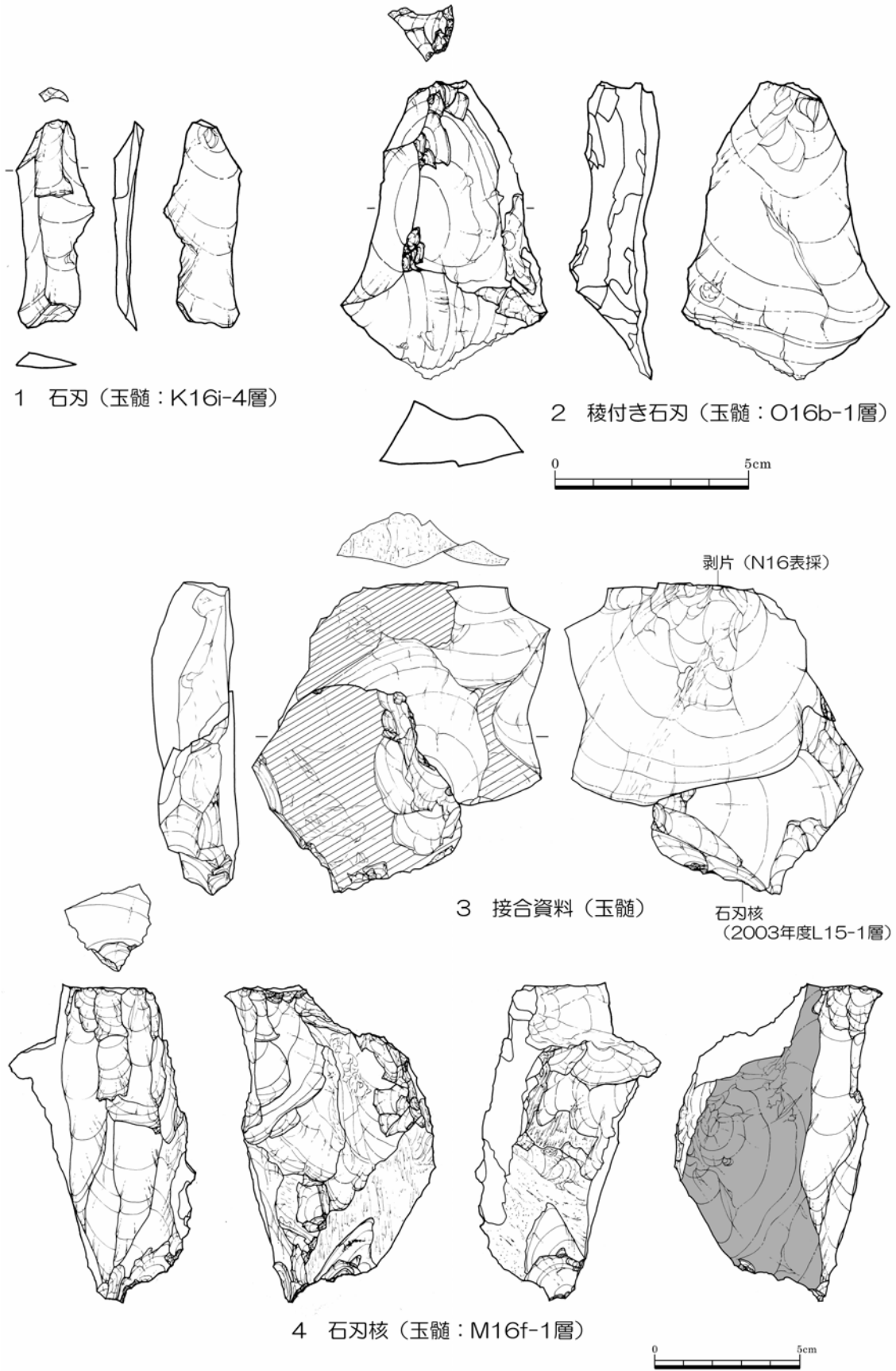


Fig.8 出土遺物 (2)



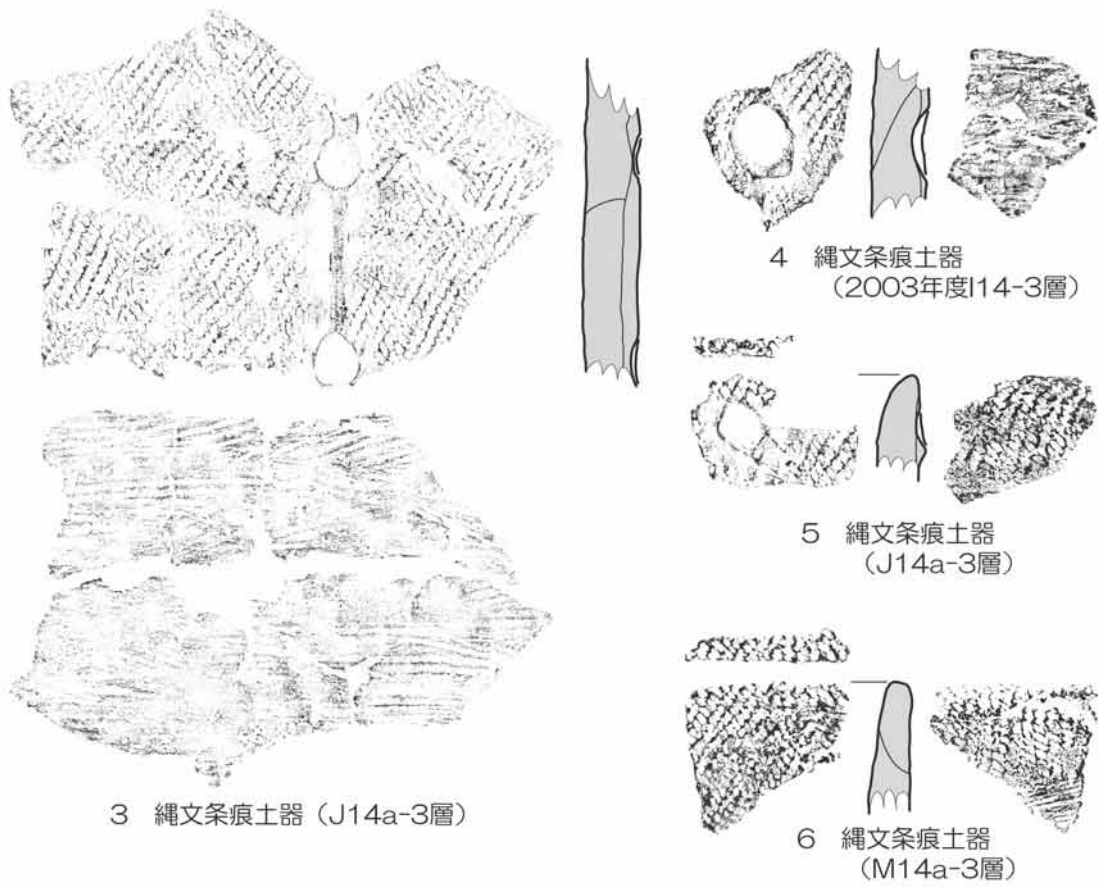
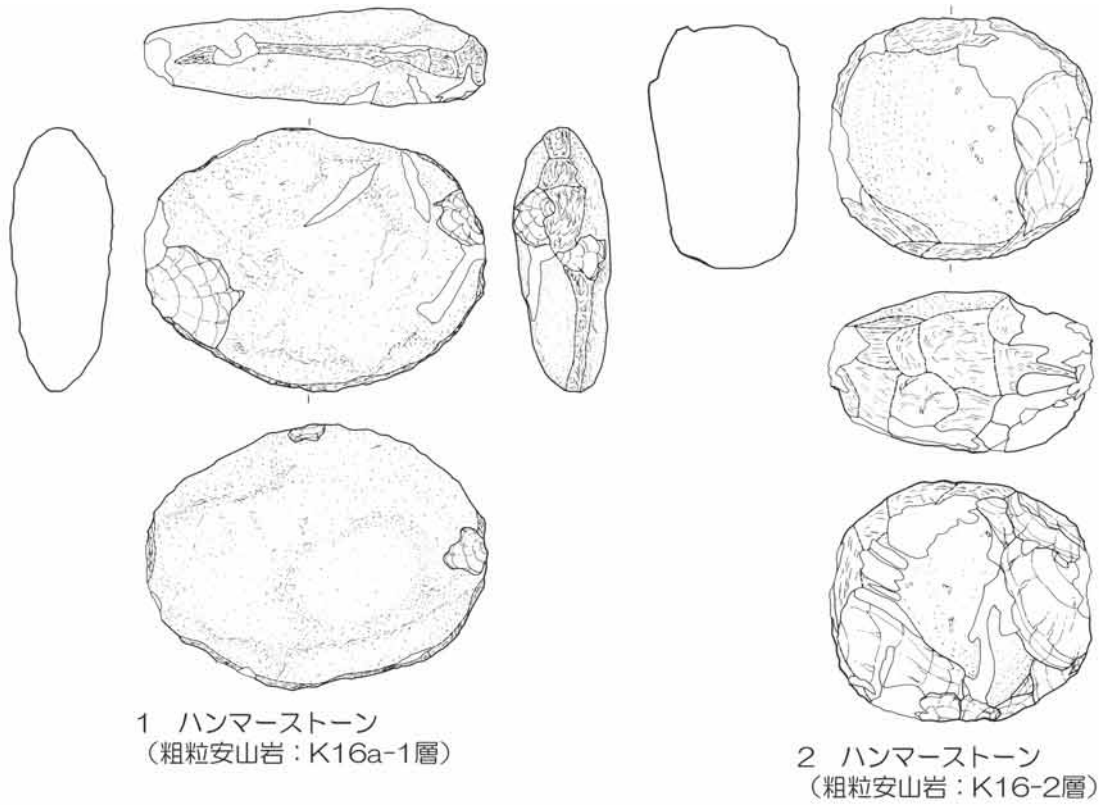


Fig.9 出土遺物 (3)



と推定される。このことは、今後の接合作業などによって検証していく。

**新川流域遺跡群の性格** 採集された石器の点数(約 1,500 点)と発掘資料の点数(226 点)そして推定される石器集中区の範囲から見るならば遺跡の規模は、原産地遺跡として大規模なものではないし、石器集中区が群集する状況にもない。このような背景には、珪化木原石が高館丘陵の至る所に存在するのではなく、賀籠沢遺跡の東側に約 300m 離れた地点にある珪化木埋蔵地(注 2)のように、例えば大きくても直径 60cm、長さ 1~2m 程度の珪化木が散漫に点在しているため、遺跡の規模も大きくはならなかったことが考えられる。

新川流域遺跡群は、北海道白滝遺跡群(黒耀石)や奈良県二上山遺跡群(サヌカイト)のように石器石材が豊富に産出する原産地遺跡とは、石材採取形態が異なる様相を示している。後二者などの石材原産地遺跡では、石器石材が常に採取され、石器製作活動が長期間にわたって営まれるケースが多い。本遺跡では、玉髓を利用した縄文・弥生時代の石器がほとんどみられない。石器組成や石刃技術の技術形態からみても、原産地遺跡としては旧石器時代のごく短期間に営まれた蓋然性が高い。つまり、新川周辺では、後期旧石器時代のナイフ形石器文化段階のごく短期間に居住していた人びとが、点々と露出している 1~2m 大の珪化木原石を狙って、石器製作を集中的に行い、結果としてこのような遺跡が新川流域の各地に形成されたと考えられる。

**展望** 今後の調査においては、南北トレンチ 2・3 区で検出した石器の広がりを確認し、ブロックの完掘を目指したい。また、賀籠沢遺跡周辺の原産地遺跡の調査、そして原産地で製作されたナイフ形石器などの製品を持ち込んだ遠隔地遺跡、さらには玉髓を包含する珪化木埋蔵地の踏査も同時に行っていきたい。

## 注

注 1: J14a および昨年度調査した I14 グリッドの 3 層下部では、縄文条痕土器の破片がややまとまって出土した。それらは、胎土に繊維を含む深鉢形土器の口縁部と胴上部の破片である。口縁部は緩やかに外反するが、底部形状は不明である。文様は縦位に貼付された太い隆帯の上面に連続して指頭状圧痕が施されている。地文は横位回転の単節縄文である。内面には横走条痕文のほか、上部に縄文施文を伴う場合がある。本資料の類例は宮城県小梁川遺跡原尻地区(真山ほか 1987)、福島県松ヶ平 A 遺跡第 2 遺物包含層(鈴鹿 1984)などの北上川下流域および宮城県中南部から福島県北部地域に見られ、相原淳一(1990)により縄文時代早期後葉のいわゆる「梨木畑式」に比定されている。

注 2: この珪化木埋蔵地では、直径 60cm 大(長さは不明)の珪化木が 1 本見られる程度で、豊富にあるという状況ではない。

## 参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に」『考古学雑誌』76-1 pp.1~65
- 阿部博志・山田晃弘 1994 「事業報告」『東北歴史資料館年報 平成 5 年度』p.3
- 大場正善 2004 「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について 東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髓原産地遺跡からの予察」『宮城考古学』6 pp.1~34
- 佐川正敏・大場正善 2003 「賀籠沢遺跡 2003 年度発掘調査の成果」『東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』pp.41~53
- 鈴鹿良一 1984 「松ヶ平 A 遺跡(第 2 次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書』福島県文化財調査報告書第 129 集
- 田村俊和 1986 「谷山県自然環境保全地域の地形・地質」『谷山県自然環境保全地域学術調査報告書』谷山県自然環境保全地域学術調査委員会 pp.19~33
- 真山悟ほか 1987 「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』宮城県文化財調査報告書第 129 集
- 村田町教育委員会 1995 『村田町遺跡地図』